グロスター公リチャードの王位簒奪

石　原　孝　哉

I

ヘイスティングズ卿の処刑によって事態は急展開を見せる。反リチャードのグループは壊滅し、政治の主導権は全くリチャードとバッキンガム公が掌握した。しかしこの段階では、名目上の国王は依然としてエドワード五世であった。その様子をマンチーニは次のように述べている。

> Thus far, though all the evidence looked as if he coveted the crown, yet there remained some hope, because he was not yet claiming the throne, inasmuch as he still professed to do all these things as an avenger of treason and old wrongs, and because all private deeds and official documents bore the titles and name of King Edward V. (1)

マンチーニはこの時点で、あらゆる証拠からしてリチャードが「王座を切望している」ように見えるが、まだいくつかの希望が残っているとして、その理由を二つ挙げている。一つは、「すべては反逆罪ないし過去の悪逆に対する報復として行ったものだという体裁をとり、王位を要求していない」点である。もう一つは、「個人的な行為にせよ公文書にせよ、あらゆるものに国王エドワード五世の称号と名前が付されていた」ことである。

マンチーニの指摘の通り、リチャードやバッキンガム公は表向き 6 月 22 日に戴冠式を実行するという建前を崩していなかった。それは、ウエストミンスターに籠っていた王弟ヨーク公を庇護所から出すようにと皇太后を説得するときの大義名分が、「新王の戴冠式には、王位継承権者であるヨーク公の出席が

不可欠である」というものだったことからも分かる。諮問会議はこのリチャード等の主張を受け入れ、6月16日にカンタベリー大司教のトマス・バウチャーがウエストミンスターに出向いてエリザベス皇太后を説得することになった。難色を示す皇太后に対して、大司教は戴冠式が終了した後には、再びヨーク公を彼女のもとに返すと説得した。この時庇護所はリチャードの兵によって取り囲まれ、もし彼女がこの申し出を断れば軍隊が庇護所に踏み入るかもしれないとの不安もあったために、彼女はヨーク公を引き渡すことに同意した。

庇護所は宗教的な聖域ではあったが絶対的なものではなく、リチャードの父であるヨーク公リチャードは1454年に政敵のエクセター公（Henry Holland, 1430-75）を捕えるために聖域を破っているし、エドワード四世も1471年に、テュークスベリー修道院の庇護所に逃げ込んだサマセット公（Edmund Beaufort, 1438-71）らを、修道院長の制止を無視して強奪するなどの前例があった。かくして、17日にヨーク公は兄エドワードのいるロンドン塔に移送された。また、このころリヴァース伯らの処刑命令を持った使者がヨークに向かって出発した。彼らがポンテクラフト城で処刑されたのは25日であった。なお、多くの年代記が、彼らは「裁判なしに処刑された」と述べているが、ノーザンバーランド伯のもとで何らかの形で裁判は開かれたことが分かっている。

さて、ロンドン塔に移送されたヨーク公は兄のエドワード五世とともに、塔内の奥まった部屋に住まわされた。時を同じくして、エドワード五世の侍医として王に侍（はべ）っていたジョン・アージェンティン博士は城外に去るように命じられた。国王の側近が退去させられたのは、逃亡を援助するのではないかという危惧があったためとされる。なお、アージェンティン博士はイタリア系の医師、占星術師でマンチーニの主たる情報提供者と目されている。

Ⅱ

この様な事態の中で戴冠式の予定日22日は刻々と迫ってきた。リチャードにはすぐにも対応しなければならない問題があった。一つは、エドワード五世

がリチャードに反感を募らせ、即位後に報復する可能性があったことである。次に、ヘイスティングズ卿の処刑によって諮問会議の中でもリチャードに反感を持つ者が増えたと思われることである。最後に、国王は戴冠式を済ませれば議会を招集して開催することができるが、そうなると事態は流動的となり、予断を許さない。この様な状態の中でリチャードに、実力行使を可能にするはずの北部からの援軍の到着を待つ余裕はなかったものと思われる。リチャードから援軍を要請されたヨーク市は 4000 名の兵士を集め、彼らは 19 日にロンドンに発つことを目指していたが、たとえ 19 日に出発できたとしてもロンドンに着くのは早くても 25 日であった。

このような切迫した事情から、6 月 22 日、当初戴冠式が予定されていた日に、リチャードはついに王位簒奪へ向けて公然とした動きをみせた。トマス・モアによれば、リチャードはこの混乱に乗じて一気に王冠を要求するのが最善と考えたが、それは極悪なことであるからそれを人々に悟られずに実行せねばならない。その為に「味方に誘いこめそうな、武力又は策略で役に立ちそうな人間を集める」必要があった。こうして白羽の矢が立てられたのが「ロンドン市長のエドモンド・ショウ、市長の弟のジョン・ショウ、それにアウグスティノ修道会の管区長、修道士ペンカー」(2) であった。モアによれば、市長は「傲慢にも出世を望んでいたので、自分の昇進のためなら市を彼らの野望にまかせてもいいというような人間だった」。(3) 後の二人は、「神学博士で立派な説教師で、ともに徳よりは学識に優れ、学識よりは名声があった」(4) という。モアはこれに続く場面で二人の説教がいかに拙劣で欺瞞に満ちているかを詳細に語っている。

実はモアの記述には間違いがあり、この悪名高き説教を行ったのはジョン・ショウではなくて、ラルフ・ショウが正しく、彼はケンブリッジ大学の神学者であった。ラルフ・ショウの説教は大変有名で、どの年代記にも紹介されている。最初にマンチーニを見てみよう。

Edward, said they, was conceived in adultery and in every way was unlike the late

duke of York, whose son he was falsely said to be, but Richard, duke of Gloucester, who altogether resembled his father, was to come to the throne as the legitimate successor. (5)

人々によれば「エドワードは不倫によってできた子供であり、故ヨーク公に少しも似ていない」、エドワードが公爵の息子であるというのは「間違い」であり、一方グロスター公リチャードは「全くの父親似で」、「正当な後継者として王座に就くべきである」というのである。マンチーニも指摘しているように、これは公然と口に出して言うのがはばかられるばかりか、自分の母親の恥を晒し、父の名誉さえ汚すものである。たしかに、エドワード四世は際立って背が高く、胸広く、整った顔立ちをしていることが肖像画などからも理解できる。一方リチャードは小柄で、父親のヨーク公も小柄であったことが知られている。

さてリチャード三世の王位継承の正当性については、年代記によって多少重点の置き方が異なる。多くは、ラルフ・ショウの説教を引き合いにこの問題を論じているので、それを追ってみよう。例えば『大ロンドン年代記』では、エドワード四世の子供たちが正当なる王位の継承者ではないことが強調され、エドワード四世自身については、「摂政ほど正当なる（ヨーク公リチャードの）息子ではない」と、かなり遠回しな表現でその正当性を否定している。

ポリドール・ヴァージルは、セント・ポールでラルフ・ショウ (6) が人々を前にして説教をした様子を次のように説明している。すなわち、「先王エドワードはヨーク公の子供ではなく、誰か他の人物の子供である。なんとなれば、エドワードは背が高いのに対して父親は小柄であった。エドワードは顔が大きかったのに対して父親は顔が小さく、丸かったからである。」(7) この様な理由をあげて説明した後、ショウ博士は次のように結論付けた：

Howbeyt, yf suche matters were well consyderyd, no man could dowt but Richard, now in place, was the dukes trew soone, who by right owght to inheryt the realme dew to his father; (8)

このようなことを考慮すれば、何人たりとも、「公爵の本当の息子であるリチャードが、父親からその領土を継承すること」に疑問を持つことはできないはずだ。

ショウ博士はこのように語ったにもかかわらず、「この説教を聞いた聴衆は、驚き、混乱し、このように事を運んだリチャードを嫌悪したこと」、また「これがヨーク家にとって恥であるばかりでなく王国にとって恥であること」、さらに「公衆の面前でこれを公言したことが、もっとも純粋で名誉ある生活を送ってきた彼の母親にとっていかに不名誉、恥辱であったこと」(9) をヴァージルは事細かに説明している。なお、注目すべきは以下の一節である。

> But ther ys a common report that king Edwards chyldren wer in that sermon caulyd basterdes, and not king Edward, which is voyd all truthe; for Cecyly king Edwards mother, as ys before sayd, being falsely accusyd of adultery, complanyd afterward in sundry places to right many noble men, wherof some yeat lyve, of that great injury which hir soon Richard had doon hir. (10)

ヴァージルは、この説教において「私生児呼ばわりされたのはエドワード王の子供たちあり、エドワード王ではない」との風聞があることを全く正しくないと断じ、その理由を、「不当に不倫の濡れ衣を着せられたエドワード王の母親シシリーが」、後にあちこちで多くの貴族たちに、そのうちの何名かはいまだに存命であるが、「息子のリチャードが彼女に与えたこの上ない屈辱について不満を述べていた」からであるとしている。

ショウ博士が、「エドワード四世自身がヨーク公の子供ではないこと」、「エドワード四世の子供が私生児であること」の 2 点を主張したことは他の年代記からも明らかであるが、ヴァージルはヨーク公夫人の証言に注視するあまり、子供たちが庶出であるという話を否定しているのである。勅命を受け、王から情報提供者を与えられて歴史を書いたはずのヴァージルすらも、うわさに惑わされてこのような初歩的な間違いを犯していることに留意すべきである。

資料の中でこのいきさつを最も詳しく述べているのはモアの本である。モアによれば、リヴァース伯等、反対派を一掃した後、摂政は急いで自分が王冠を得ることが最善だと考えた。そこで市民に人気のあるラルフ・ショウ等に説教をさせ、世論を導くことにした。こうして、エドワード王自身、その子供たち、あるいはその両方が庶出であると申し立てることになった。しかし、エドワード王自身の庶出を主張すれば、母親の不倫を言わねばならないのでこの点は婉曲に述べ、エドワード王の子供たちの庶出については詳しく説明することにした。

モアの説明は詳しく、話はエドワード四世とエリザベス・グレイの結婚以前まで遡る。ヘンリー六世を廃位して、王権を安定させた後にエドワード四世は結婚を決意して、ウォーリック伯等をスペインに送り、スペイン王女との結婚の交渉を委ねた。交渉は順調だったが、その間に王はランカスター派の騎士の未亡人エリザベス・グレイと結婚しようとした。王母であるヨーク公夫人は、王の縁談を交渉中のウォーリック伯のことを気遣い、エリザベスの身分を憂い、この結婚に反対した。「エリザベス・グレイが、たとえ他の全ての点であなたにとってふさわしいとしても、未亡人であるということだけで、結婚してはいけない十分な理由であると私には思われます。最初の結婚を未亡人との結婚で汚すことは、威厳においてと同様、清潔さにおいて、聖職者に次ぐべき君主の神聖な権威にふさわしくなく、大きな傷であり、ひどい不面目なのです。」(11) このようにヨーク公爵夫人は心を尽くして説得したが、王が決心を変えないと分かると、昔エドワードの子供をもうけたエリザベス・ルーシーという女性と結婚させようとした。彼女は、「王はエリザベス・ルーシーと婚約し、神の前で彼女の夫となっていた」と主張した。このために、司教も結婚を強行することができず、エリザベス・ルーシーが皆の前に呼び出されて証言をすることになった。彼女は人々の前で、「王は彼女にとても優しい言葉をかけたので、結婚してくれると本当に期待したし、もしこのような親切な言葉がなかったら、彼の子供をもうけるような親切を王に示したりはしなかった」と述べたものの、「婚約はしていなかった」と告白した。これによって、結婚に対する障害が取

り除かれ、王はエリザベス・グレイと結婚した。(12) モアの話では、エドワード四世の母親シシリーが、エリザベス・ルーシーとの婚約を楯に、息子の結婚を思いとどまらせようとしたという点が他の年代記とは違っている点に注目したい。

さらに、モアの本に従って経緯を追ってみる。リチャードとバッキンガム公はエドワード四世の弱点であるこの点をつけば、リチャードが王位に就く大義名分ができると考えた。

> Now then as I began to shew you, it was by the protectour & his counsaile concluded, that this doctour Sha should in a sermon at Poules Crosse, sygnifie to the people, that neither king Edward himself, nor the Duke of Clarence, were lawfully begotten, nor were not the very children of ye duke of Yorke, but gotten vnlawfully by other parsons by thaduoutry of the duches their mother. And y^{t} also dame Elisabeth Lucy was verely the wife of king Edward, and so the prince and all his children bastardes y^{t} were gotten vpon the quene. (13)

当時セント・ポール大聖堂の前の広場に説教壇があり、ここでは日曜日ごとに説教が行われていた。説教壇の上には十字架が飾られていたことから、通称ポールズ・クロスと呼ばれていた。そこで庶民に人気のある説教師ショウ博士の口から、摂政であるリチャードと諮問会議の結論であると前置きしたうえで、「エドワード王もクラレンス公も法的に正しい出生ではなく、ヨーク公の真の子供ではなく、ヨーク公夫人と他人との間にできた子供であること」、さらに、エリザベス・ルーシーこそエドワード王の正妻であり、故に王妃がもうけた「王子や他の子供たちは私生児であること」を、人々に説くことを計画した。

> According to this deuise, doctour Shaa the sonday after at Poules crosse in a gret audience (as alway assembled gret numbre to his preching) he toke for his tyme *Spuria vitulamina non agent radices altas*. That is to say bastard slippes shal neuer

take depe roote. Therupon when he had shewed the great grace that god giueth & secretly infowndeth in right generacion after the lawes of matrimony, then declared he that comenly those children lacked that grace, & for the punishment of their parentes were for the more parte vnhappie, which were gotten in baste and speciallye in aduowtrie. (13)

このような目論みで、翌日の日曜日セント・ポールズ・クロスで、多くの聴衆を前に、*Spuria vitulamina non agent radices altas* という有名な演説をするのである。これは「庶出の子､挿し木は決して深い根を下ろさない」という意味で、神は法に則ってなされた正しい結婚によって生まれた子孫には神秘的な恩寵を与えるが、「庶出の子、特に不義の子は、その恩寵に欠け、両親の罰のために、たいてい不幸になる」というものである。この様な話を、旧約聖書や古い歴史からの言葉を引用して説明した後、「エドワード王はエリザベス王妃と正式な結婚をしておらず、神の前でエリザベス・ルーシーの夫となった。故に、彼の子供は庶出である」(15) と主張した。

モアの話は細部に至るまで詳しく説明されているが、史実という点ではかなりの間違いがある。すなわち、ウォーリック伯がエドワード四世の妃候補として交渉していたのは、スペインではなくフランスのサヴォイ公女ヴォーナであった。ロンドン市長の弟はジョン・ショウではなく、ラルフ・ショウであることは既に述べた。さらにエドワード四世が婚約したとされる女性はエリザベス・ルーシーではなくエリナー・バトラー (Eleanor Butler) が正しい。

しかしながら、エリザベス・ルーシーがエドワード四世の愛人であったこと自体は事実である。公式文書では、エリナー・バトラーとの婚約が正当であると認められているものの、これは形式上のことである。エドワードには他にも多くの愛人がおり、彼女はそのうちの一人にすぎない。エリザベス・ルーシーはエドワード四世が若かった頃はもっとも有力な愛人であった。エドワード四世には三人の婚外子がいるが、そのうちの二人はエリザベス・ルーシーとの間の子供とされる。ライル子爵アーサー・ウエイト Viscount Lisle (1480－1451

～ 2）とエリザベス・ウエイト（Elizabeth Waite）という娘がそれである。アーサーはエドワード四世の庶子として知られるが、その母親については不明の部分が多かった。しかし最近の研究では、エリザベス・ルーシーのルーシーというのは結婚してからの名字で、娘時代の姓はウエイトと言い、ハンプシャーの紳士トマス・ウエイトの娘であるということが分かってきた。エリザベス・ウエイトについても不明の部分が多いが、アーサーの妹とされる。(16) 3 人目の私生児も女で、名前をグレイスという。彼女についても詳しいことは不明だが、1492 年にエリザベス・ウッドヴィルが死亡した時に葬儀に臨席しているので、彼女に養育されたものと推測される。

ところで、モアの主張するようにエドワード四世の正式な妻がエリザベス・ルーシーだとすればこれら三人の子供たちこそ正統な王位継承者である。ことにライル子爵アーサー・ウエイトは長男として王位継承者の筆頭に挙がらねばならない人物である。彼は後に子爵として叙爵され、父エドワードの名字を名乗り Arthur Plantagenet, First Viscount Lisle となっているから、エドワード四世の実子であることが公認されたものと思われる。

Ⅲ

ショウ博士の演説は人々を驚かせたが、人々の間でははなはだ不人気で、特にエドワード四世自身がヨーク公の実の子ではないとのくだりは人々の顰蹙（ひんしゅく）をかった。ヴァージルによれば、その後友人たちから非難された博士は自分の行為を恥じ、心労のあまり間もなく死んでしまった。(17) モアにも「友人たちから大恥さらしといわれ」、それがひどく応えて 2 ～ 3 日のうちに死んでしまったと書かれている。(18)

この説教が不評で、市民の協賛を得て王位につくという目論みが外れてしまったために、リチャードとバッキンガム公は作戦を立て直さなくてはならなかった。そこで 1 日後の 6 月 24 日、「学識もあり話も上手なバッキンガム公が」(19) ロンドン市長、市参事会員、市民などをギルドホールに集めて、グロスター公

リチャードこそ正統な後継者であると演説した。さらに翌25日には、貴族たちや郷紳、市民を集めた集会で同じ趣旨の演説を行った。

マンチーニは、バッキンガム公が貴族たちを前にして、「エドワード四世はエリザベス（ウッドヴィル）と結婚する前に、ウォーリック伯が仲立ちをした女性と正式に婚約していたために、彼女との結婚は無効である」と演説したと述べている。これは、「大陸では代理結婚と呼ばれるものである」とマンチーニは解説している。代理結婚は当時王侯貴族の間では珍しくなかった儀式的な結婚であるが、ウォーリック伯が仲立ちしたボナ・オヴ・サヴォイとエドワードとの間に代理結婚を行ったという事実はないので、マンチーニが大陸の慣習を勝手に当てはめて想像したものと思える。既に述べたように女性の名前はエリナー・バトラーが正しい。なお、マンチーニは25日の集会についてのみ言及しているが、バッキンガム公の演説は2日に分けてなされたことが他の年代記から明らかである。

ヴァージルは、「この演説は驚くほど長いもので、リチャードがいかに国王にふさわしいかを雄弁に述べた」と述べているが、具体的な内容についての説明はない。(20)

演説の内容に詳しく触れているのはモアである。モアによるバッキンガムの演説の部分は9ページにわたる長文であるが、その特徴は；エドワード四世の時代が必ずしも良い時代ではなかったこと、ロンドン市長トマス・クックや不遇の死を遂げた商人のバーディットや筋を通して辞職した主席判事マーカムなどエドワード四世の政治の犠牲者を具体的にあげて前王の治世を論難したこと、前王の時代に幾多の戦争によって多くの国民が犠牲になったこと、国王の情欲のためにショア夫人の例に見られるように、多くの婦人たちが犠牲になったこと、ロンドン市からは王家が最も恩恵を受けていること、ヨーク家にはグロスター公リチャードという優れた王位継承者がいること、エドワード四世の子供たちは正嫡ではないこと、ショウ博士が示唆したヨーク公夫人の件については摂政が尊敬する母親のことなどで言及したくないこと、王国の権利と称号はヨーク公の正嫡の者に受け継がれるべきこと、国民、特に北部の貴族や地方

代表は摂政に王位を継承してもらえるようお願いすることになったこと、皆さんの考えを示してほしいと言ったときに「リチャード王」の声が出るはずだったが市民の反応がなかったこと、これを見てバッキンガム公はさらに雄弁に演説をしたが反応がなかったこと、市長が記録裁判官フィッツウイリアムに問うと彼は公爵の言葉を反復したこと、人々がざわめいていると公爵の家来 ネスフィールドの家来たちや、摂政の部下たちが入ってきて「リチャード王、リチャード王」と叫んだこと、これを受けて公爵は、全員の意志が決まったので明日みんなで摂政にお願いに行きましょうと締めくくったこと、などである。バッキンガム公は、日曜日の説教で不評だったエドワード四世自身がヨーク公の正嫡ではないとの部分になるべく触れず、エドワード王の時代の問題点をあげ、その子供たちが庶子であることや、摂政がヨーク家の正当な後継者であることを力説して、強引に貴族たちの賛成を取り付けたことが分かる。(21)

翌朝市長は市参事会員と主だった市民を伴ってベイナード城に向かった。バッキンガム公も多くの貴族などを引き連れて同道し、摂政に目通りを申し込んだ。しかし、摂政は用件が分からなければ会えないと固辞したので、改めて礼を尽くして面会を乞うた。摂政は部屋からは出てきたが二階の回廊から人々を見下ろしていた。そこでバッキンガム公は、言葉を選んで王国の救済を懇願した。しかし摂政はこの要請を固辞した。

> …yet such entier loue he bare vnto king Edward and his children, that so muche more regarded hys honour in other realmes about, then the crowne of any one, of which he was neuer desyrous, that he could not fynde in his hearte in this poynte to enclyne to theyr desyre. For in all other nacyons where the trueth wer not wel knowen, it shold paraduenture be thought, that it were his owne ambicious minde and deuise, to depose the prince & take himself the crown. (22)

その理由は、彼は「エドワード王とその子供たちに全面的な愛情を持っている」ので、王冠よりも―そんなものは望んだこともないが―近隣の国における自分

の名誉の方を重んじる。「だから彼らの要望を受け入れるわけにはいかないのだ。」なんとなれば、「真実が分からないよその国では、それは野心であり、王子を廃嫡して自分が王座に就こうとするたくらみであろうと考えられるからである。」

バッキンガム公はこの回答を得て、皆と相談の上、「エドワード王の子孫はもはや君臨すべきでない」、もし摂政がどうしても固辞するなら「他の誰かを探さねばならぬ」(23) と詰め寄った。この最後の言葉に摂政もしぶしぶ彼らの請願を受諾した。

このようにリチャードが、貴族や市民の嘆願を受けて国王になることを受諾したというくだりはそのままシェイクスピアに受け継がれ、『リチャード三世』の名場面のひとつになっている。

モアはここまでのいきさつを詳細に述べているが、その後の部分は英語版がなく、ラテン語でのみ書かれ、しかもごく簡単にまとめられている。死後『リチャード 3 世史』を編集したラステルの英訳からその部分を見てみよう。それによれば、翌日、摂政はウエストミンスター・ホールに行き、自ら王冠を受けることを民衆に宣言した。彼はそこで、朗々たる演説で、貴族、商人、職人、とりわけ法律家を味方につけるべく演説した。不和を否定し、和の大切さを説いた。その見本として、摂政を恐れて庇護所に身をひそめていたフォッグなる人物を連れ出し、人々の前で手をとった。人々は歓喜し、称賛したが、賢明な人はそれをまやかしと受け取った。

> When he hadde begonne his reygne the twenty sixth daye of Iune, after this mockishe eleccion, than was he Crowned the sixte day of Iuly. And that solemnitie was furnished for the most part, with the selfe same prouision that was appointed for the Coronacion of his nephew. (24)

この文章から、リチャードの治世が 6 月 26 日から始まったことが分かる。一方、「このまやかしの選出を経て」という文面から、一連の手続きを全て欺瞞

とみなしていることも分かる。「彼は7月6日に戴冠された」とする文章に続く、「そして戴冠式は、大部分、彼の甥のために準備されたもので行われた」一文は、これがあからさまな王位簒奪であることを強く示唆するものである。

Ⅳ

次に『続クローランド年代記』を見てみよう。この年代記には、ショウ博士の説教やバッキンガム公の演説については一言も言及がなく、摂政であるリチャードが6月26日に北部やウエールズなどから多くの兵士を招集するように命じ、同日ウエストミンスターの大ホールで自らが王位を要求したと示されている。(25)

> It was put forward, by means of a supplication contained in a certain parchment roll, that King Edward's sons were bastards, by submitting that he had been precontracted to a certain Lady EIeanor Boteler before he married Queen Elizabeth and, further, that the blood of his other brother, George, duke of Clarence, had been attainted so that, at the time, no certain and uncorrupt blood of the lineage of Richard, duke of York, was to be found except in the person of the said Richard, duke of Gloucester. At the end of this roll, therefore, on behalf of the lords and commonalty of the kingdom, he was besought to assume his lawful rights. (26)

それは「羊皮紙に書かれた巻物に書かれた嘆願書の形で提出され、エドワード王の息子達は庶子であると書かれていた」。その理由は「王はエリザベス王妃と結婚する前にエリナー・ボテラー(27)なる女性と婚約(precontact)していたからである。『続クローランド年代記』のこの部分が脚光を浴びるようになったのは、前後の関係からこの羊皮紙の巻物が議会に提出されたと判断されたからである。しかしながら当時の議会の記録にはこの種の記録は一切なかったために、一種の謎とされた。ここから歴史家たちの好奇心が、この謎の解明に向け

られるのであるが、仔細については後述する。

注目すべきは、ここではエリザベスとの結婚の前にエリナー・ボテラーと婚約していたがゆえに、子供は庶子であるという教会法に基づく説明のみが記載され、エドワード王自身の出自にはまったく言及がないことである。

これに続く一説では「もう一人の兄クラレンス公ジョージの血統は権利を剥奪されており、ヨーク公の確かな、純潔な血筋はグロスター公リチャードの他には見当たらない」と、リチャードの正当性が述べられ、最後には「わが王国の貴族、平民のために（リチャード）に是非とも正当なる権利を引き受けてほしい」と嘆願している。

ここで、『続クローランド年代記』で要約された「羊皮紙の巻物」、すなわち議会で審議された公式文書について説明する。これは *Titulus Regius* と呼ばれ、今日でもその写しが残っているが、この文書が表に出るまでには数奇ないきさつがあった。

ボズワースの戦いで勝利したヘンリー七世であったが、血統的には王位に遠く、エドワード四世の娘エリザベスとの結婚は政治的な意味で絶対必要条件であった。国王となったヘンリー七世がまず最初にやったことは、議会を招集し、エドワード四世の子供たちが庶子であるとの法律を無効化することであった。そしてその典拠となった *Titulus Regius* を始めその関連文書をすべて破棄し、何人たりともそれを読むことを禁止した。こうしてリチャード三世が正当なる君主であることを示すすべての文書は完全に葬られることとなった。エドワード四世が、エリザベス・ウッドヴィルと結婚する前に別の女性と婚約していたという情報をもたらしたのはバース・ウエルズ司教で、かつてエドワード四世の大法官を務めていたロバート・スティリントンである。(28) ボズワースの戦いでヘンリー七世が勝利をおさめると、スティリントンは真っ先に逮捕されて、投獄された。一旦は釈放されたものの、ランバート・シムネルの反乱に関与したとして再び投獄され、1491 年に獄死した。これでリチャード三世の王位の正当性を証言する人物もいなくなり、この件に関するすべては闇に葬られたはずであった。手堅い政治手法に定評のあったヘンリー七世であったが、

上手の手から水が漏れるという例え通り、思わぬ偶然から *Titulus Regius* は再び脚光を浴びることになった。すべてが廃棄されたはずの *Titulus Regius* の全文は、テューダー王朝が滅んで間もなく発見された。既に述べたように、最初は『続クローランド年代記』の前述の文章から、「羊皮紙に書かれた巻物」があることは分かっていたが、その実物もコピーも存在しなかった。しかし、歴史家で考古家のウィリアム・カムデンが、持ち前の探究心と執念を発揮し、ロンドン塔の古文書の中から完全な写本を発見した。これをジョン・スピード（John Speed）が 1611 年に『英国史』（*History of Great Britain*）に収録し、ジョージ・バック（Sir George Buck）が 1619 年にこれを資料として『リチャード 3 世史』（*The History of King Richard the Third*）を書いた。この様にしてヘンリー七世の徹底的な破棄命令を免れた一枚の写しであるが、今日ではウィキソースに転載され、世界中のだれもが気軽に原文を読むことができる。

> And here also we considre, howe that the seid pretensed Mariage bitwixt the above named King Edward and Elizabeth Grey, was made of grete presumption, without the knowyng and assent of the Lords of this Lond, and also by Sorcerie and Wichecrafte, committed by the said Elizabeth, and her Moder Jaquett Duchesse of Bedford, as the common opinion of the people, and the publique voice and same is thorough all this Land; and herafter, if and as the caas shall require, shall bee proved sufficiently in tyme and place convenient. And here also we consider, howe that said pretensed Mariage was made privaly and secretely, without Edition of Banns, in a private Chamber, an prophane place, and not openly in the face of the Church, aftre the Lawe of Godds Churche, bot contrarie thereunto, and the laudable Custome of the Church of Englond. (29)

これによれば；「エドワード王とエリザベス・グレイのまやかしの結婚はさまざまな仮定の根拠に基づいて王国の貴族たちの承諾もなくなされたこと、エリザベスとその母ベッドフォード公爵夫人ジャクエッタの妖術と魔法によってな

されたこと、これは人々の共通の見解であり大衆の声で王国の津々浦々に広がっていること、もし必要ならしかるべき時、場所にて十分に証明できること、これは密かに個人的に予告もなく教会外の私室で行われたものであること、教会で公に神の法に則ってなされたものではなく、敬うべきイングランドの教会慣習に反して行われたものであること」などがわかる。ここでいう予告とは「婚約者双方の教会で連続して３回日曜日に挙式の予告を公示して異議の有無を問うイギリスの教会法の手続き」のことである。このようにエリザベスとの結婚は教会法の手続きを踏んでいないばかりか、重大な誤りを犯していた。それは、エドワードが王妃エリザベスと結婚する前にエリナー・バトラーなる女性と婚約（プレコンタクト）していたからである。婚約とは教会法による結婚の予約であり、これによってその他の人との結婚は無効になるという手続きである。

> And howe also, that at the tyme of contract of the same pretensed Mariage, and bifore and longe tyme after, the seid King Edward was and stode maryed and trouth plight to oone Dame Elianor Butteler, Doughter of the old Earl of Shrewesbury, with whom the same King Edward had made a precontracte of Matrimonie, longe tyyme bifore he made the said pretensed Mariage with the said Elizabeth Grey, in maner and fourme abovesaid. Which premisses being true, as in veray trouth they been true, it appearreth and foloweth evidently, that the said King Edward duryng his lif, and the seid Elizabeth, lived together sinfully and dampnably in adultery, against the Lawe of God and of his Church. (30)

また、「このまやかしの結婚の婚約のときに、さらにその前にもまた後でも、エドワード王はシュリューズベリー伯の娘エリナー・バトラーと結婚し、固く誓約した状態であった。エリザベス・グレイとのまやかしの結婚をするはるか以前に、エドワード王はこの女性と結婚の約束をしていた」それが事実とすれば、それは明々白々なのであるが、エドワード王とエリザベス・グレイは教会と神の法に照らして、罪深くも不敬にも不倫を犯しつつ同棲していたものである。

Also it appeareth evidently and followeth, that all th'Issue and Children of the seid King Edward, been Bastards, and unable to inherite or to clayme any thing by Inheritance, by the Lawe and Custome of Englond. (31)

また、エドワード王の子孫、子供の全ては庶子であり、相続者になることはできず、イングランドの習慣や法律による相続のあらゆる権利を持つことができないことは明白である。

このように、*Titulus Regius* は二人の結婚が教会法に照らして無効であるがゆえに子どもたちは庶子であると結論付けている。これに続く文章では、もうひとりの兄、クラレンス公ジョージの血筋は権利を剥奪されており、この時点でヨーク公リチャードの明確でしかも汚点のない血筋は「ここに述べたグロスター公リチャードを置いて他にはいない」と結論付けている。なおここで注目すべきは、この公式文書にはヴァージルが強調し、モアが特筆したエドワード王自身がヨーク公の実子ではないとの情報が全く言及されていないことである。

V

このような経過を経てリチャードは王位に就くのであるが、その根拠は (1)、エドワード王がヨーク公の実子ではない、(2)、エドワード王の子供が庶子である、という二つの理由によるものである。しかし、既に見てきたように年代記によって比重の置き方が異なっている。マンチーニとモアは (1)、(2) を並列し、ヴァージルは (1) のみをあげている。『大ロンドン年代記』は、(2) を根拠とし、(1) については暗示するにとどめている。また、『続クローランド年代記』と公式文書 *Titulus Regius* は (1) にはまったく言及せずに (2) のみを理由として挙げ、クラレンス公ジョージの血統は権利を剥奪されているから、やはり相続の権利はないとしている。

(1) のエドワード四世がヨーク公の実子ではないとの話は、クラレンス公

ジョージとキング・メイカーのウォーリック伯がエドワード四世に反旗を翻してヘンリー六世を復位させた1469年にウォーリック伯が主張し、さらに1478には失脚寸前のクラレンス公ジョージが主張したものであるが、いずれの場合にも確かな証拠は示されていない。エドワードはフランスのルーアンの生まれであるが、外国生まれの国王はいつもこの種の噂に悩まされることは珍しくなかった。(32) このようないきさつから考えると、リチャードの王位継承の際にも噂として流布したことは十分考えられる。

ヴァ―ジルやモアが強調するこの説は、自らの母親を侮辱してもなお王座を手に入れるというリチャードのあさましさを強調するもので、リチャード悪人説の大きな理由とされる部分である。

一方『続クローランド年代記』や *Titulus Regius* はエドワード四世の昔の婚約を理由に、教会法違反の故に王子たちが庶出であるとしている。これは教会法を楯にしているので一定の論理性があり、議会でエドワード四世の子供たちが庶出であるとの典拠とされた公文書である。リチャード善人説をとる者は、この点を強調する。

このように資料を比較してみると、そこから一つの事実が見えてくる。すなわちリチャード三世の王位の正当性は、(1) エドワード四世が、ヨーク公の実子ではないこと、(2) エドワード四世の子供は庶子であるの2点から説明されているが、既に見てきたように (1) は同時代の記録では、マンチーニに見られるだけである。『大ロンドン年代記』にも言及されているが暗示の域を出ていない。『続クローランド年代記』や *Titulus Regius* には一切言及がない。同時代の資料が取り上げているのはもっぱら (2) の方である。

一方、テューダー王朝時代になって書かれた資料ではもっぱら (1) が強調されている。モアは (1)、(2) をともに扱っているが、事実関係に多くの間違いが見られたり、エリザベス・ルーシーとの結婚を正式なものと認めながら、その子供たちの王位継承権を無視するなどの論理矛盾も目につく。モアの他の作品やその人生観から判断しても、モアが意図的にやったとは考えにくい。そこから、モアの本の典拠となったモートンの幻の本の問題が浮上するが、このこ

とについては項を改めて説明する。

このように、時代を追って資料を比較してみれば、テューダー王朝になると、正義のあり方自体が変貌したことがわかる。見方を変えれば、いわゆるテューダー・プロパガンダが浸透して、すべての悪をリチャード三世とともに過去に葬り去るという世論ができていたとも理解出来る。ヘンリー七世が最初にやった仕事に、*Titulus Regius* を否定し、エドワード四世の子供を嫡子として認めることがあった。エドワード四世の子供が嫡子でなければ、その娘のエリザベスとヘンリー七世が結婚して、赤バラと白バラが一つになったとする「テューダー史観」は根底から覆ることになる。さればこそ、国王から任命されて歴史を書いたポリドール・ヴァ―ジルが、(2) を間違った噂として否定し、(1) をことさら強調した理由も理解できる。

このようないきさつを経て、1483 年 7 月 6 日、ウエストミンスター寺院において戴冠式が行われ、イングランド王、リチャード三世が誕生した。

Notes:

(1) Mancini, Dominic, *The Usurpation of Richard III*, Alan Sutton, 1989, p.93

(2) More, Thomas, Ed. By Sylvester, Richard S. *The Complete Works of St. Thomas More, Volume 2*, Yale University Press, 1963, p.58

(3) ibid., p.58

(4) ibid., p.58

(5) op.cit., Mancini p.95

(6) Vergil では “Sha” と表記されているほか、Shaa, Shaw, Shawe とも表記される。

(7) Vergil, Polydore, Ed. By Ellis, Henry, *Three Books of Polydore Vergil's English History: Comprising the Reigns of Henry VI., Edward IV., And Richard III*. The Camden Society, 1844, p.184

(8) ibid., p.184

(9) ibid., p.184

(10) ibid., pp.184-5

(11) op.cit., More, pp., 61-2

(12) ibid., pp.64-5

(13) ibid., p.66

(14) ibid., p.66

(15) ibid., p.66

(16) *Complete Peerage*, vol.8. p.274

(17) op.cit., Vergil, p. 185

(18) op.cit., More, p. 68

(19) ibid., p.65

(20) op.cit., Vergil, pp.185-6

(21) op.cit., More, pp.69-77

(22) ibid. p.78

(23) ibid. p.78

(24) ibid., p.82

(25) Ed. By Nicholas Pronay and John Cox, *THE CROWLAND CHRONICLES CONTINUATIONS: 1459-1486*, Richard III and Yorkist History Trust, 1986, p.159

(26) ibid., p.161

(27) 年代記により名前の綴り方が異なる。一般的には Eleanor Butler と書く。

(28) Dockray, Keith, *Richard III* ―A Source Book, Sutton Publishing, 1997, p.62

(29) *Titulus Gegius*, http://en.wikisource.org/wiki/Titulus_Regius, 2012, 5.28

(30) ibid., 5.28

(31) ibid., 5.28

(32) Ross, Charles, *Richard III*, University of California Press, 1981, p.90